



下

金松堂壽粹

中

上

戀相場花夜嵐
三編
大尾

高橋
梅堂

猫々道人綴
梅堂國政画

10 15 20 25 30 35 40 45



10

15

20

25



お花
さきうを
はふの
おちびし
ニ魚ん
上の巻
捲く通人
はるふ
周満を
あつらふ

過
ぬん
棒

眼鏡して見てさ文字もなまよみの甲斐なれた老の余と共に
 世とふる机あがくは作者華の白髪を摺る墨ふ染て壯輩
 の手柄と競ひ實盛賽きの憤発も一太刀二太刀たたくと
 三編目みの煙草休むけむあはさせぬと板えが日々夜々
 の詰催促此儘ふー立消て花の夜嵐眺望の
 遺憾戀の相場の立時か是非は結局と大
 團圓めでとしく打出し迄かた境の緒とあめろ
 と再三編の督責み久く絶一夜延仕事字性も庵の
 眼鏡を拭ひて燈下みポチく綴り畢ぬ

明治十四年仲秋

猫痴魯叟

恋月場三上



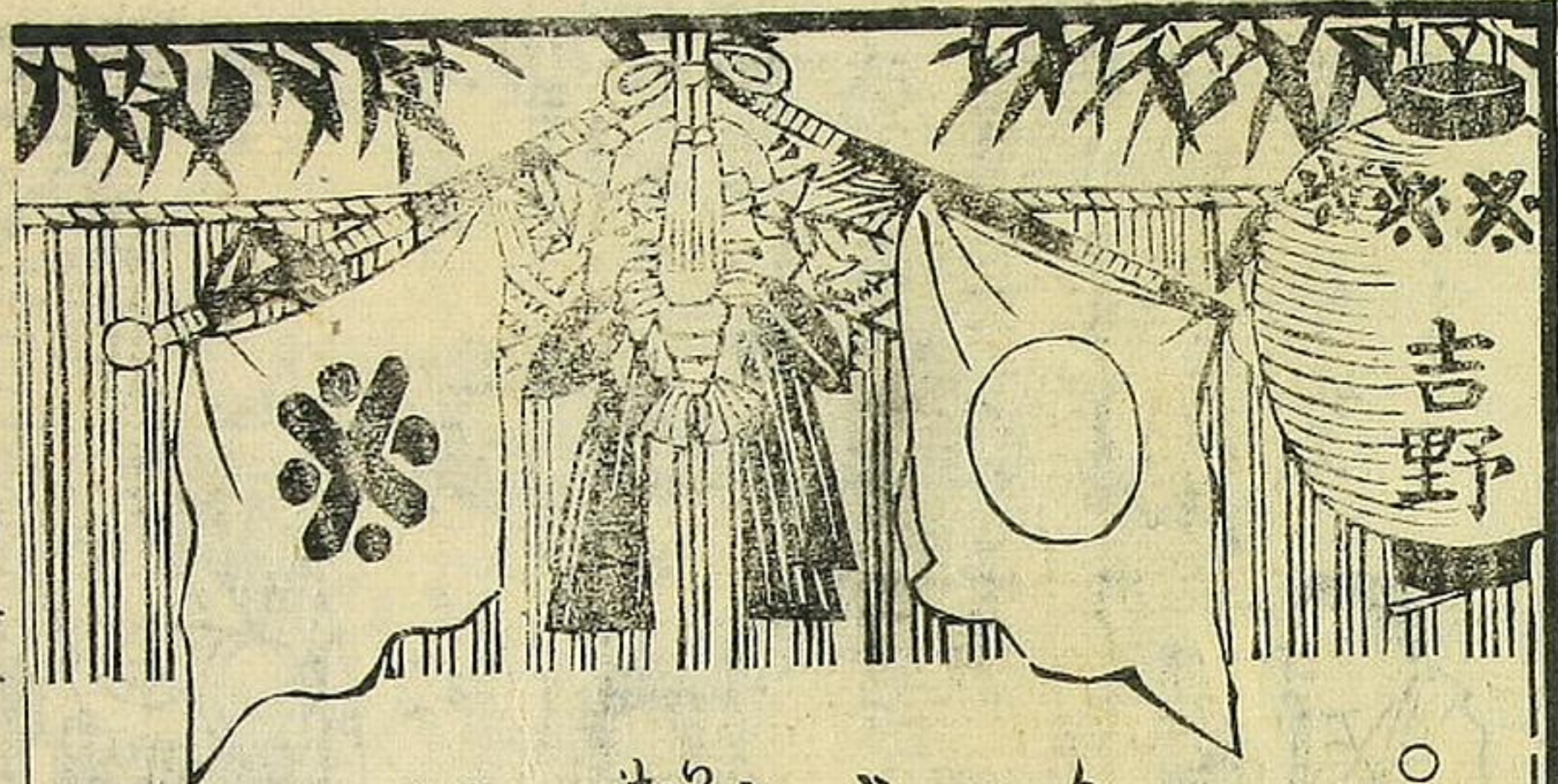


阿八重



吉野甚三郎

結し去成
 袖よへみさう
 小いひま
 解うぬらう



○去年とことしの縁の綱松と竹とのめを中ふ
 結まゝしる七五三の程とふりて金切の相戻り
 折もどりとて一月一日鬼女の面の鏡も帰
 り振るゆゆ多岐の角ありあるか仲が嫉
 り妬よ其の糸の電もそ果母のかあげと
 らせて離縁をる一の阿若を下め年をうら
 おま大りの舟のかあげのか仲が發ぎと
 おせも其原の其の糸が放流ゆ女彦の
 疾妬いつりま人走し死の事小縁切ると
 此理北道の其の糸がふるまひ疎不ぎ死牢へ
 押込て罪人同極を離れ扱ひあめく去状
 交ぬるのうとのたきまきつて登外外不飛
 出て闇雲小走旦り途中小舟あふ巡





壺を
 喉を
 「モシ」
 か廻り
 さんか頼
 ひがさうはま
 こころの一人むま
 か伸とま
 と壺所の音
 壺の方へ
 係づけまて

▲ままお名か分署さるの正
 奴の卒解の甚く
 正洗術あされて
 とまとまやう小虚
 と巡査の固て後
 僕と一所よ分署
 是とかまげと後
 連て第一方面
 署小
 たり

経
 び
 不



ともを
 友稼ぎ
 可也の乳代
 み成
 増長の
 一らて現
 房と惨い
 同夜の折檻
 産が遠
 産数穿実
 の私
 多せぬ
 上して
 を法る



ちまき
不基
とあるよをい事事の始末と乳間
せらと脱小

せとありしおあまが
がとまよふ不命の
慮のそ多く基三
糸がまよ(口明らる

双方突あ



●お仲ふえ

△証書一れを切の金と引くえふ
おあげ冊子より
をまよふ不命を
運び仲裁より下
案とあよりその
草移成

△拾ひ漬
「おん」
ちん長明
治八年中
妻小

●嫁一落り立
知る月人知

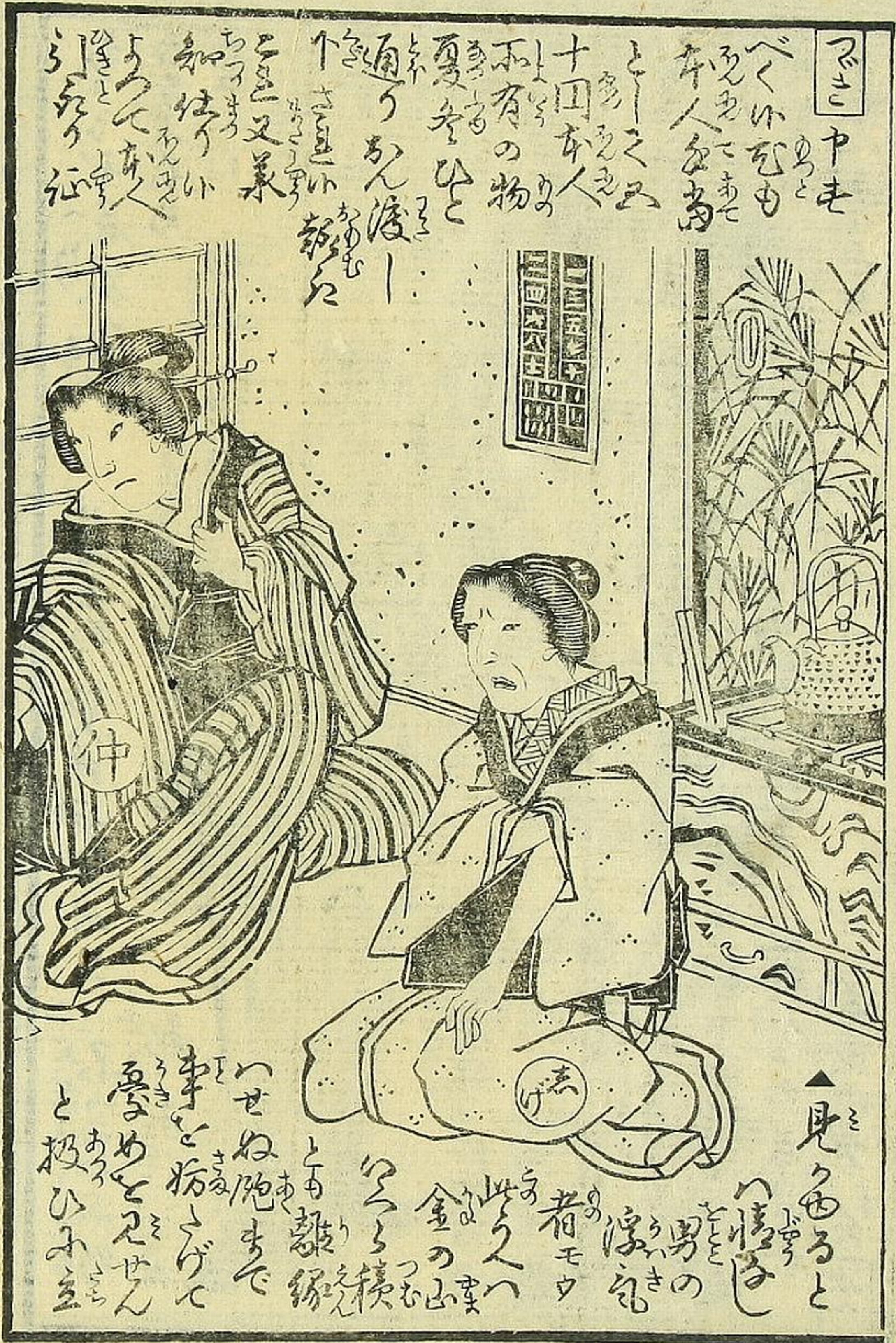


あるみぞ尻放て後
の尻つちり
ひるまて
又西ると
お云部の後
徐やうやく
示た
掛命
遊げ
お野の
か伸と
冊かあが
が方へ送りて

せるとかひるがあるべの

不空の雨竹
新ふた

△見国信り外然る小
今般きんより離
縁まをいさよ小
つた本人速う小
取中け然る上い送
箱等の義書後
美園次美引次



六目五の二

つきは續たみぞ及びなる
 のは燃動と教唆の法律
 の由るさる者みして
 他成あり自ら
 の富意を果
 さんごとと計る
 苦肉のを樹ふ
 出る業をその
 中み能分の利
 態と食むあり
 まさへ者いふ
 脚と心い現今
 と百代とせよ留ふ

▲妻のお仲が
 札物の物
 ねいふ
 困上果
 今いち葉と
 仲

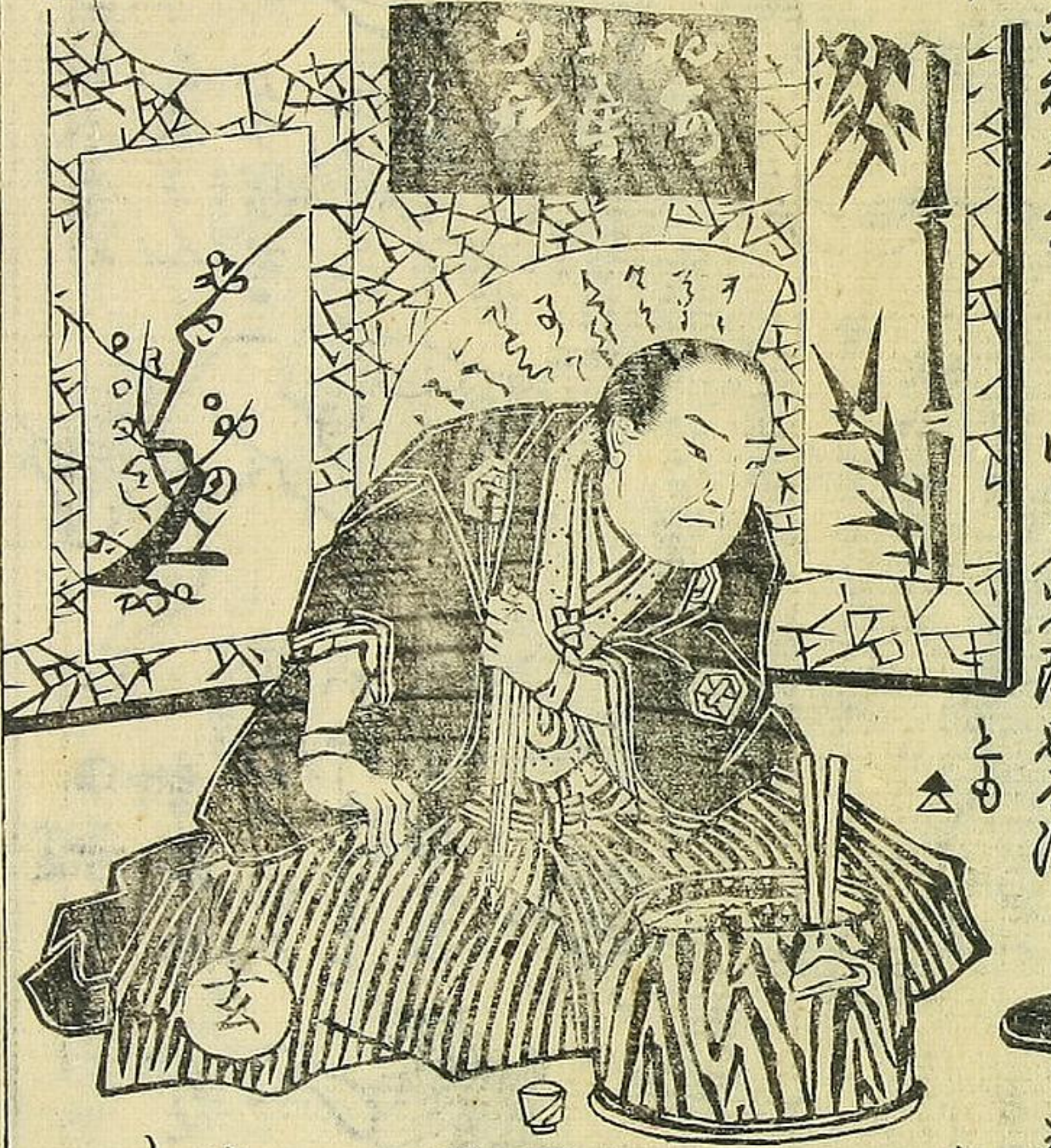
▲相候一母の
 かまげと候
 さと務やく
 みて又十四
 の衣あ全ふ
 衣敷と
 離縁
 まさ
 小定
 まりて
 かしく
 け

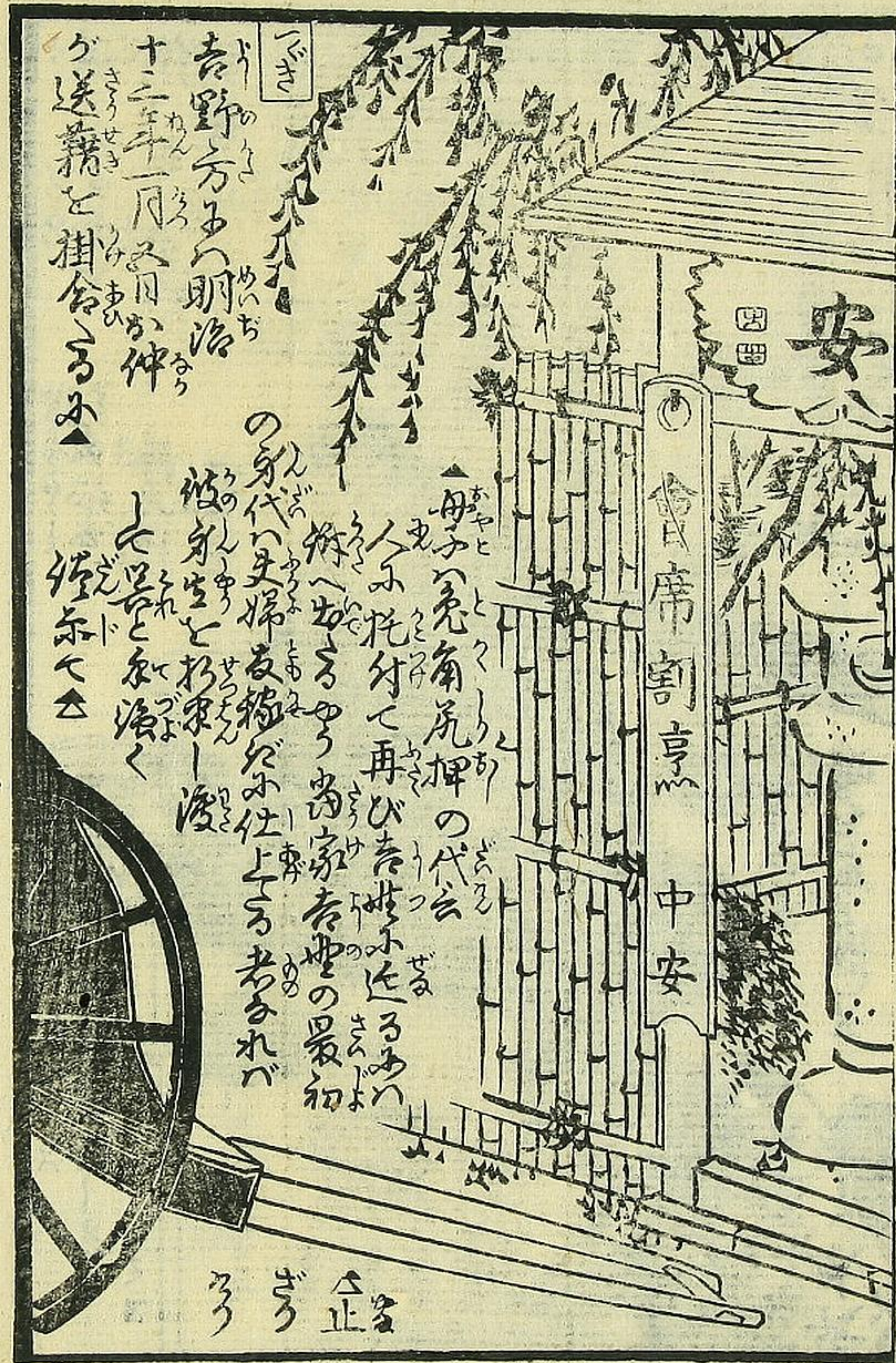


俊弁者系被双方よ
 敵と見
 且べ味方
 とあり重
 化さらふ
 決まり
 宿願
 の多し
 みり
 借も者望
 重なり

▲とも
 同業の
 何業が
 相場
 のを
 合外
 より情中
 さびしくあり
 一より
 と取

▲とも
 同業の
 何業が
 相場
 のを
 合外
 より情中
 さびしくあり
 一より
 と取





銅版開化七編

開化女用文章

義烈田天白首

金花七變化

伊呂波字

馬衣女鳴神

文 地本問屋

錦繪問屋

010190517700

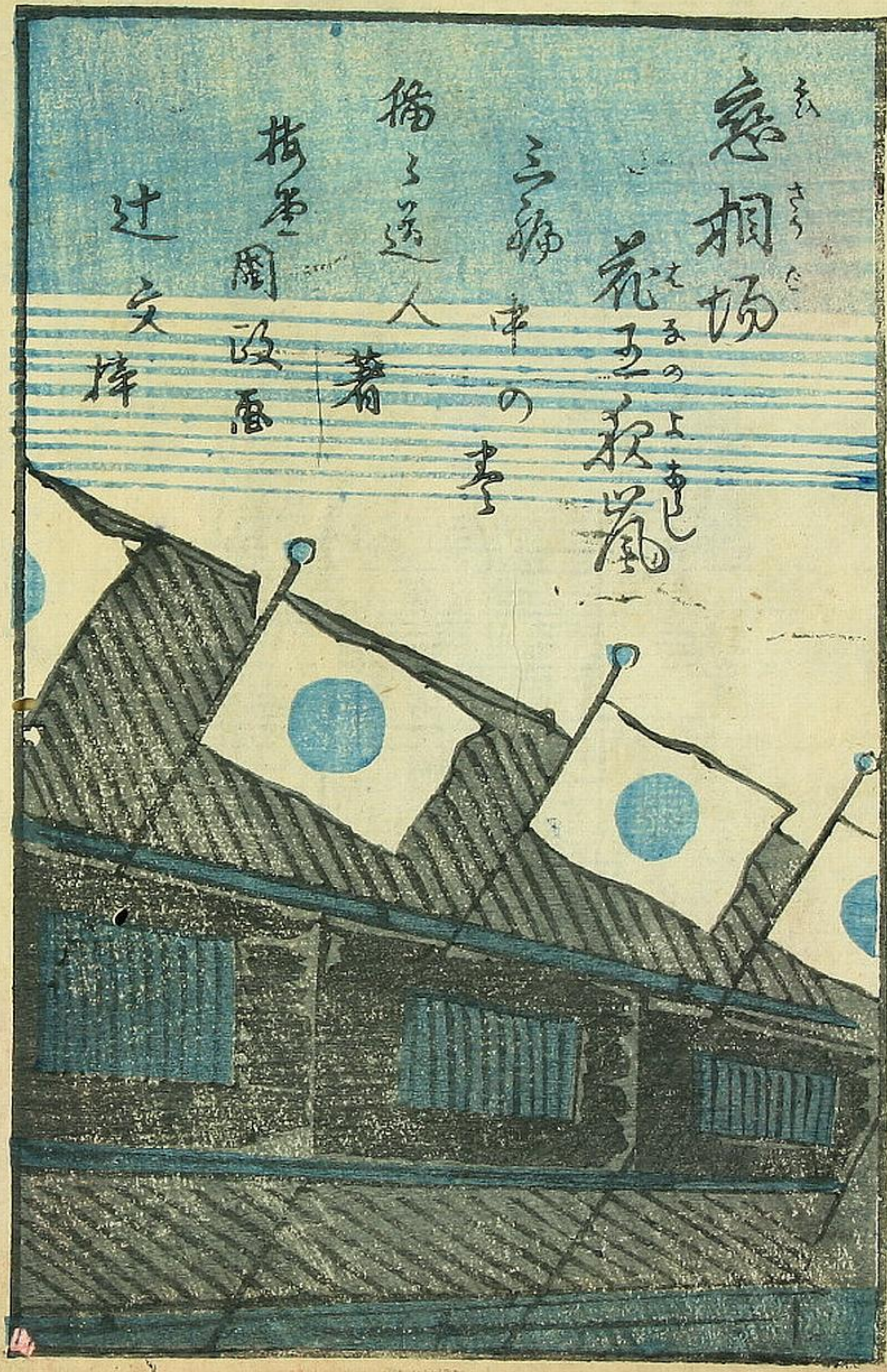




金松堂壽梓

中

A516
8



下目録三

48-7716



つぎを
 するとも
 出金まじし
 その久出産
 むま後いその
 子一誰の種
 みゆせよは方へ
 引かべ一候
 むぐら出産
 の附い何と
 産くはと出産
 あまより

我
 玉の
 函附合外
 函附合外
 三氏の珍
 衆を乞
 ひり
 道徑水

「おしと
 ぶらぶら
 毛ウ
 代言
 ねん
 二チどねん
 こひがらぬ



らうや病院
 の陰素と
 空へ真偽
 空へく
 その月の十
 旧月芝あ
 下
 東京
 病
 院
 お仲母
 子と同居

のさ
 あま真の
 腰柱
 ふ

なるおら
 さが
 お仲母
 本家
 指
 野面
 く
 髪

関係

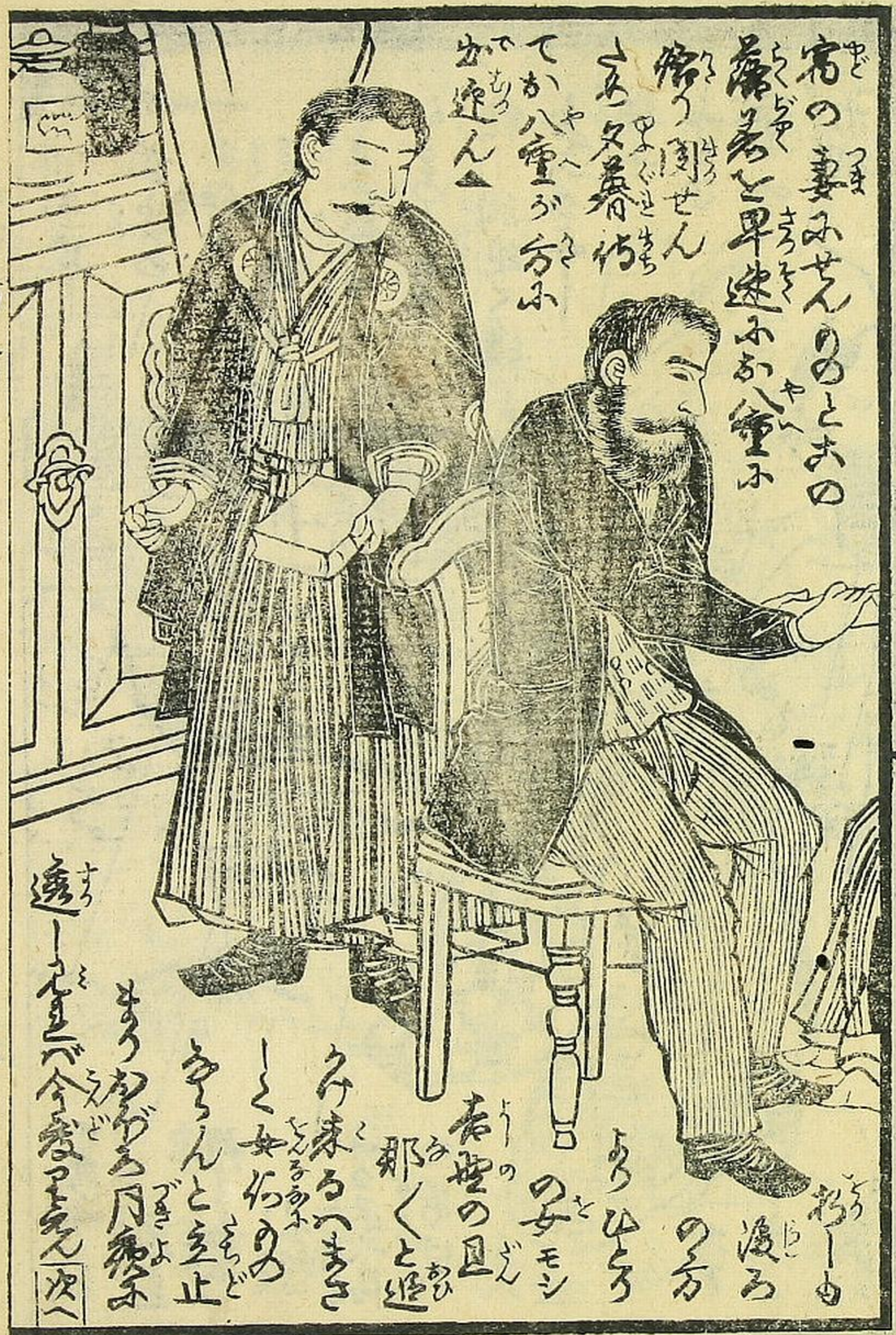
「あんなに由緒のあつた小

と一て我家を去つたあやう

あんなに由緒のあつた小
一札と書置
よきおし金
さ離縁とあつた
久々甚之助由安堵
の思ひと下りて重考
とあつたせりやく
今の憚り
所らるるれ
をさしつかへ
重とむ久取

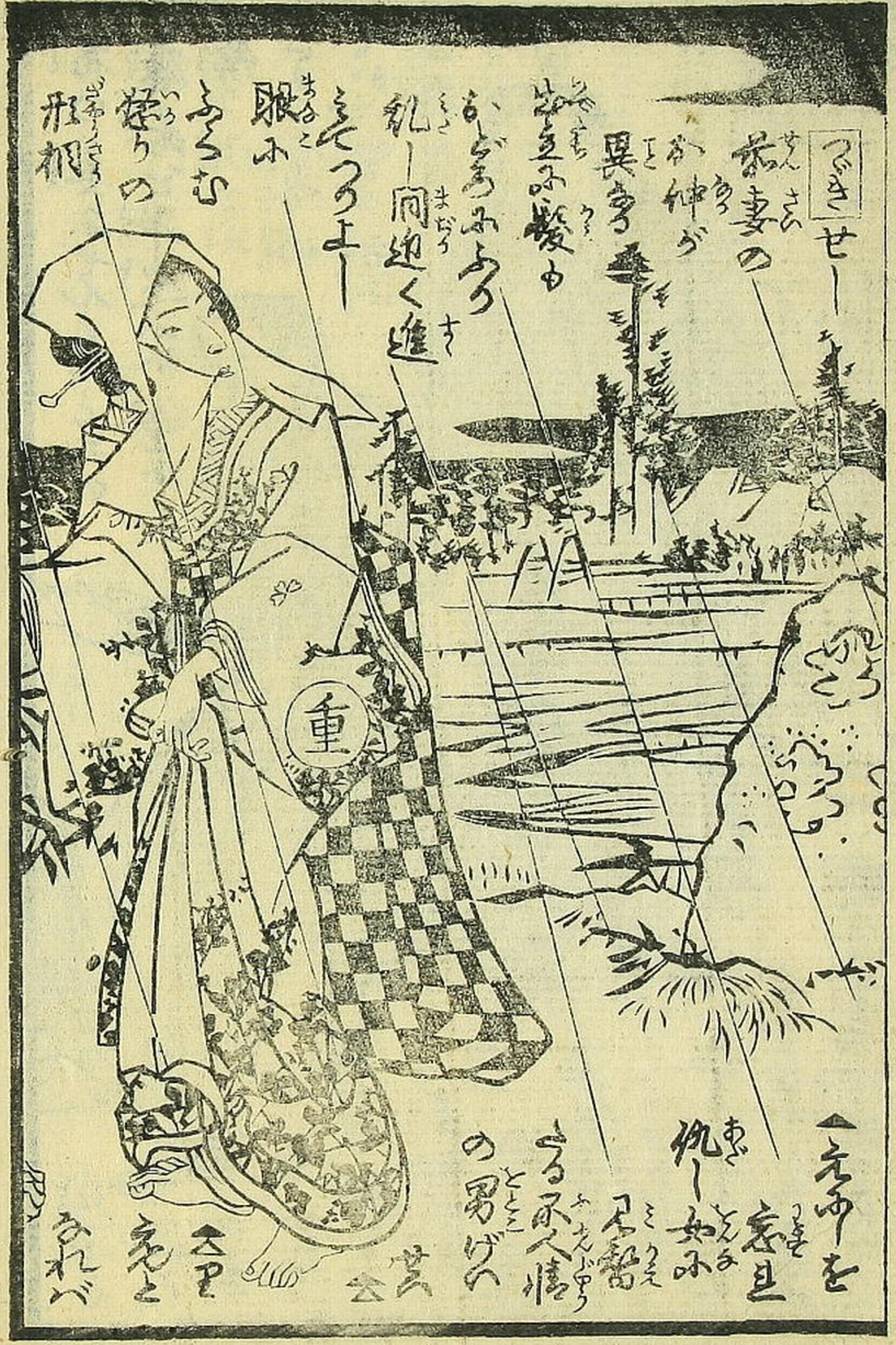


あつたせりやく
今の憚り
所らるるれ
をさしつかへ
重とむ久取
あつたせりやく
今の憚り
所らるるれ
をさしつかへ
重とむ久取



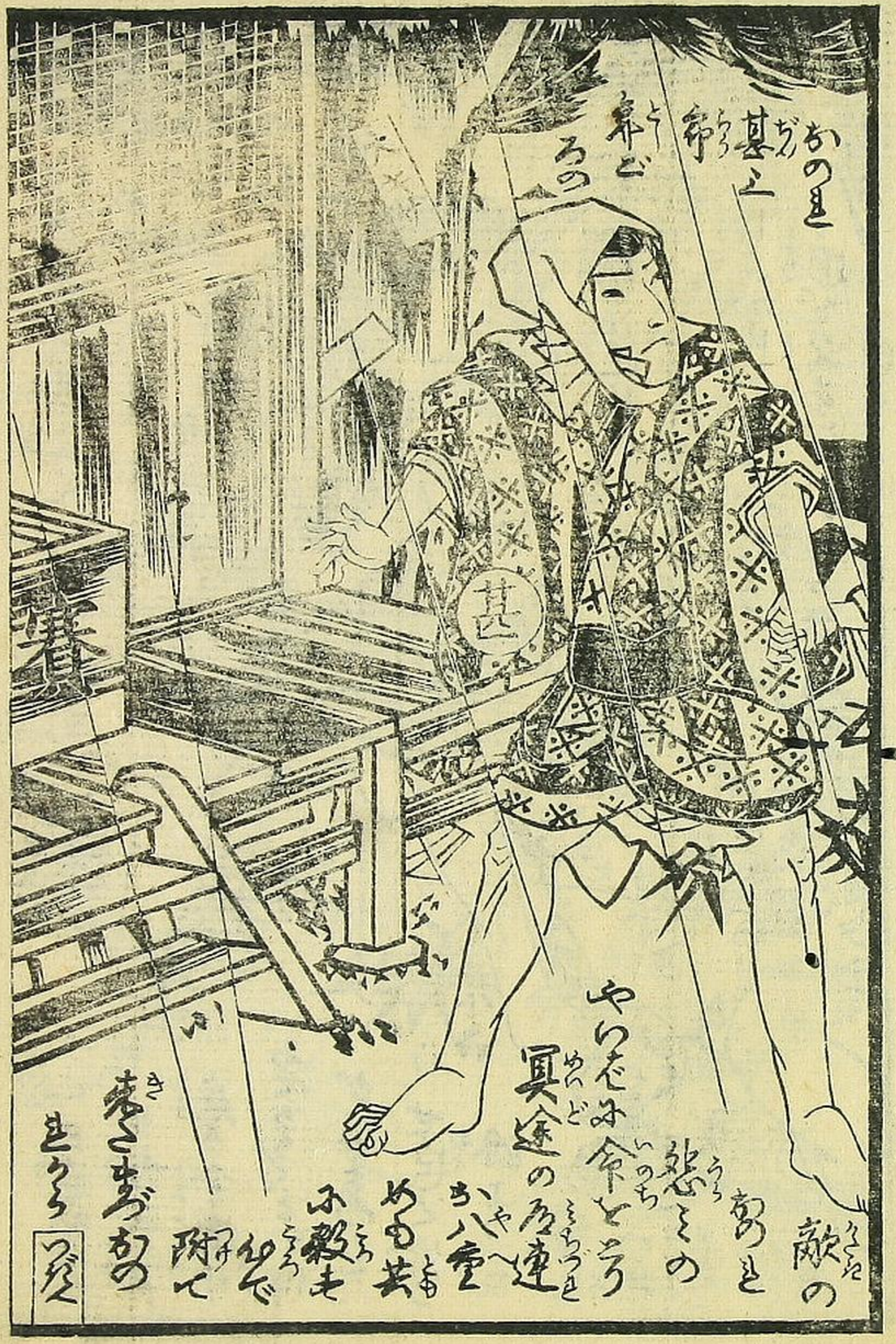
宿の妻ふせんとのとあつた
落着くと早速ふか入重ふ
病つとせん
よきおし金
てか八重が方ふ
か入重ふ

あつたせりやく
今の憚り
所らるるれ
をさしつかへ
重とむ久取
あつたせりやく
今の憚り
所らるるれ
をさしつかへ
重とむ久取



つぎせー
 赤妻の
 か神が
 異身
 此まふ後ゆ
 おふふあ
 礼一同迎く進
 まつろよ
 服小
 ありむ
 徳りの
 形相

▲を中を
 仇一
 名留
 する不人情
 の男げの
 六
 六
 六
 六
 六
 六



おのま
 甚と
 命
 命

敵の
 怨みの
 やらた命と
 冥途の
 八重
 めも共
 不殺
 附て
 妻まが
 是うら
 つ



つき息の看止ん
と願ひおろ
懐奴
勢ひ込し疲ぬの
吾か甚之仰へ舞ぬさう
あふかたしちりふらり
よ遠と見えあへ一か仲がふ

五尺おぢ
か方ふ
来今途中
あうくとお仲
があまろを
せじく傍
海より
へ来る
おん
結



利統
そとて
ねと
ねと
の傍らの隣の

此場と隣んとりどた

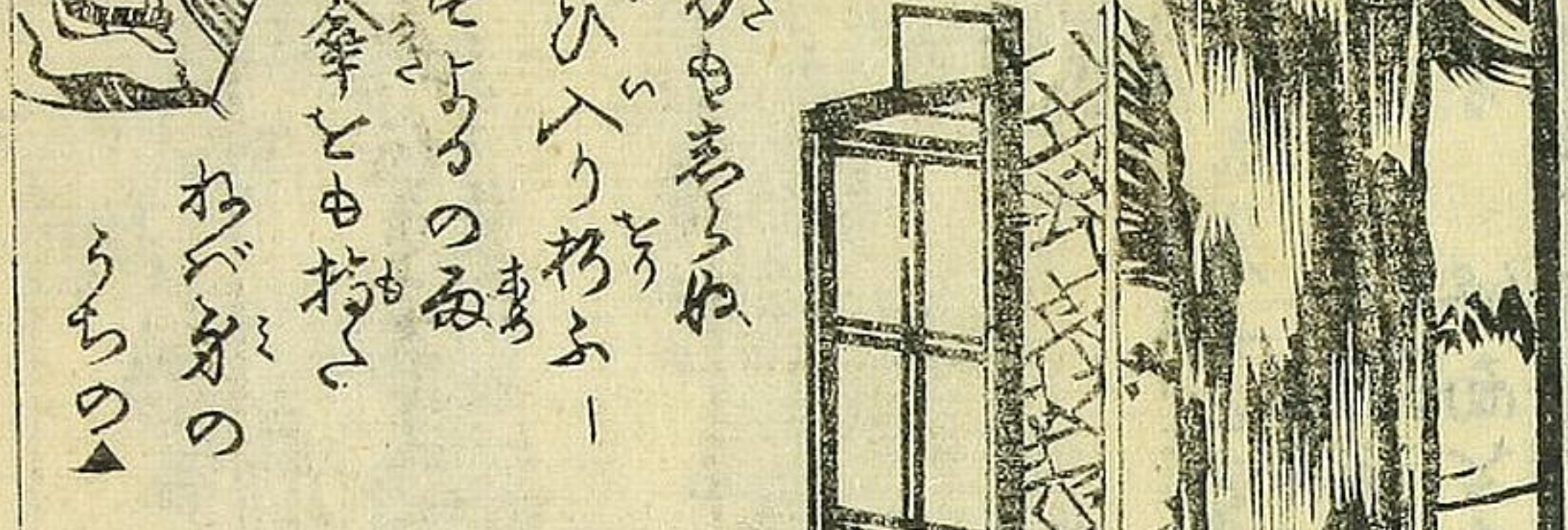
あま
女と
て万一怪
我

つきまゝ
あつらへば
世のあ
笑ひ新
の種み
らんゆ
やう
とを
ふゆ
童
支



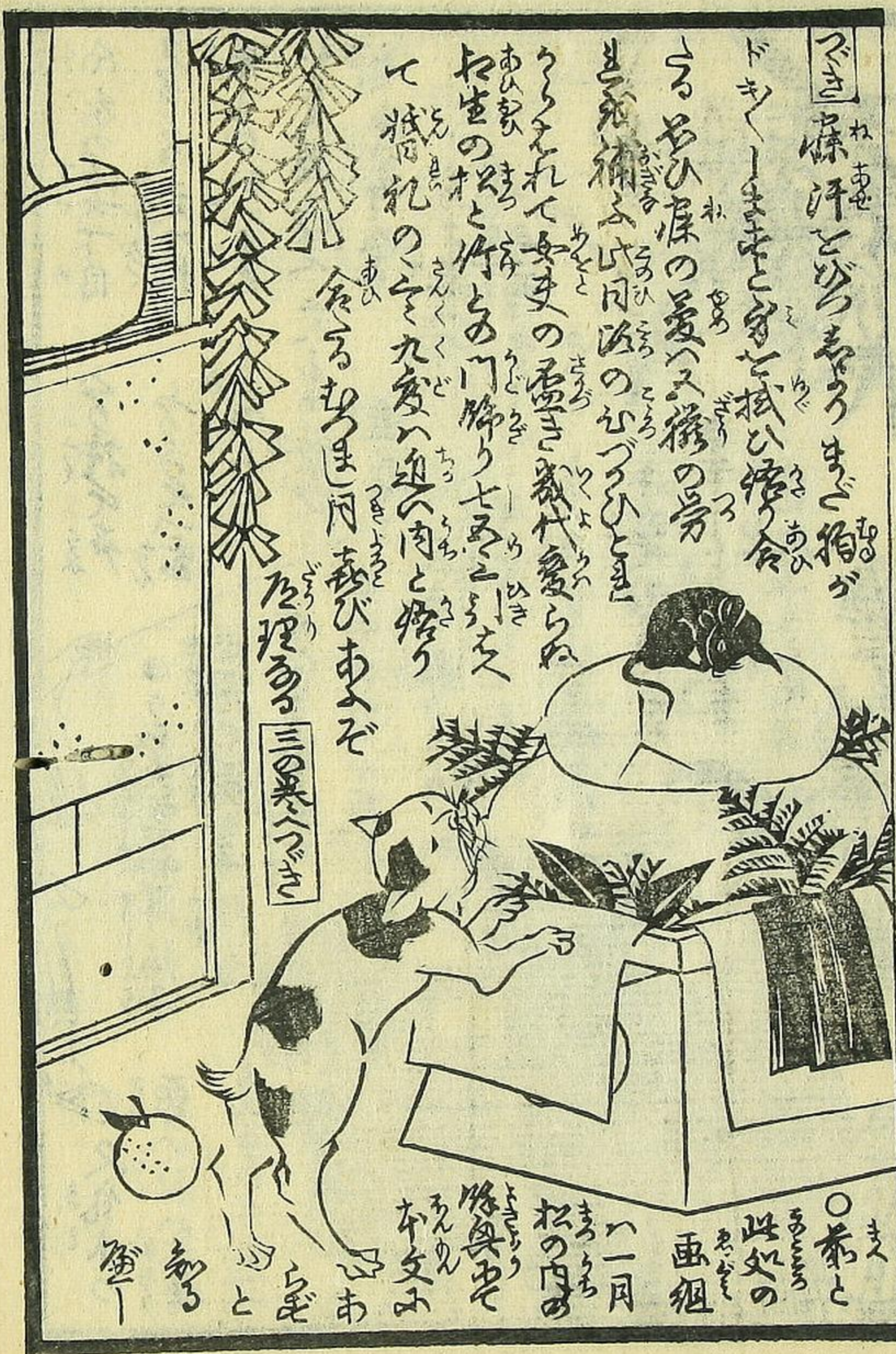
ひさの
乳
奈
老
種
出
女
鬼
岡
と
鹿

そとく
まの糸
ふ糸と
ひ
ま
山
像
傘
お
ら



い
あ
凌
ま
重
角
小
本
燈
ね

ね
つ



緑汗とびつるまろきと拍が
 けきくしままをさかむけつる命
 うるちひ涙のまへみ後の号
 ときを補ふけ日波のむづみとま
 うらえれて女史の書き置かた後らぬ
 おまのせと竹とあ門脚り七三のま
 て猪札のくま九夜へ追入肉と猪り

命をむまほ月夜びあふぞ
 及理ある三の果へつき

〇茶と
 此処の
 画組
 へ一月
 松の内
 松の内
 本文ふ
 〇茶と
 此処の
 画組
 へ一月
 松の内
 松の内
 本文ふ

銅版開化七編 全
 開化女用文章 全

近世紅聞 全
 義烈回天百首 全
 金花七變化 全

伊呂波字引 全
 尾 編

文 錦繪問屋

010190517719



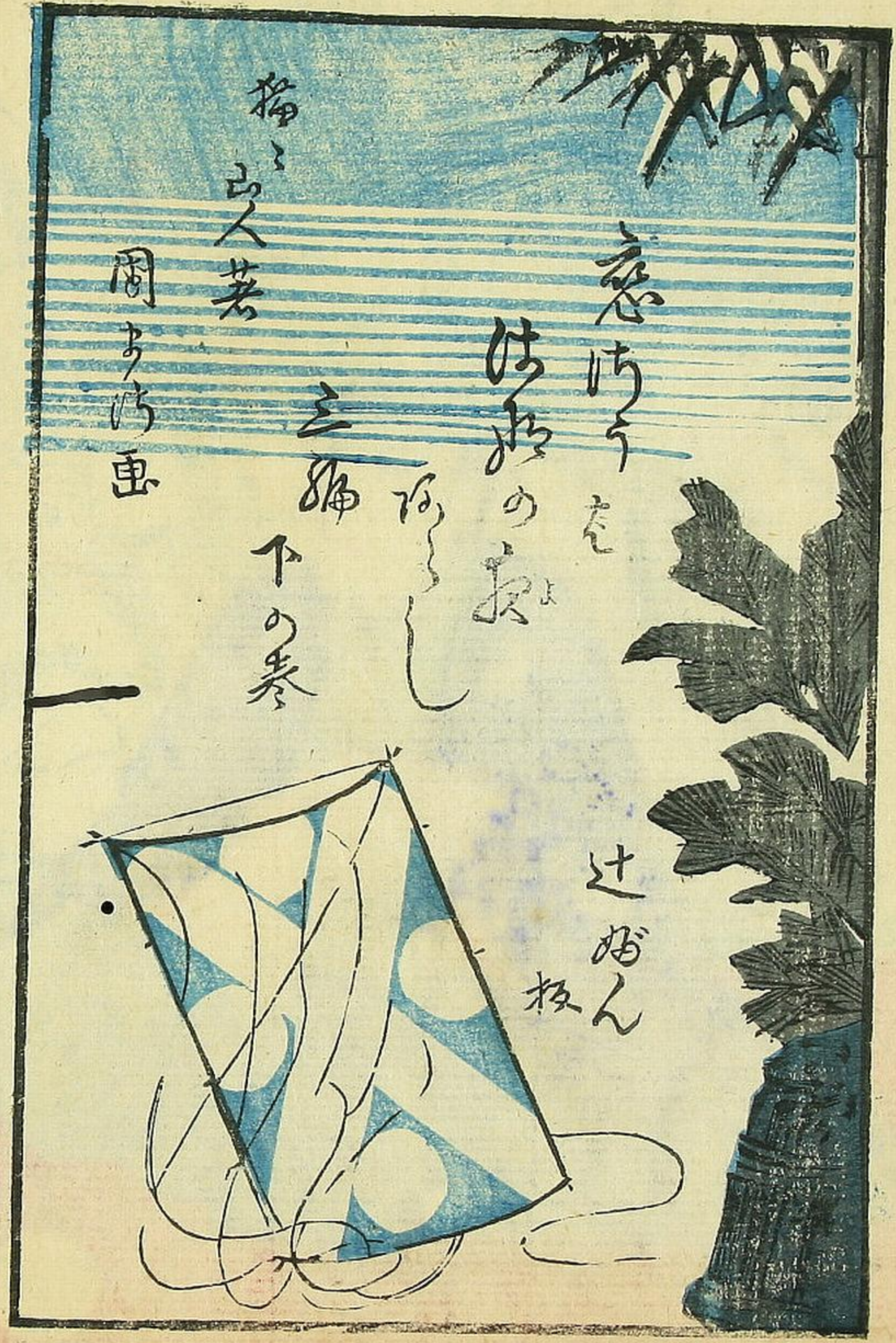


10

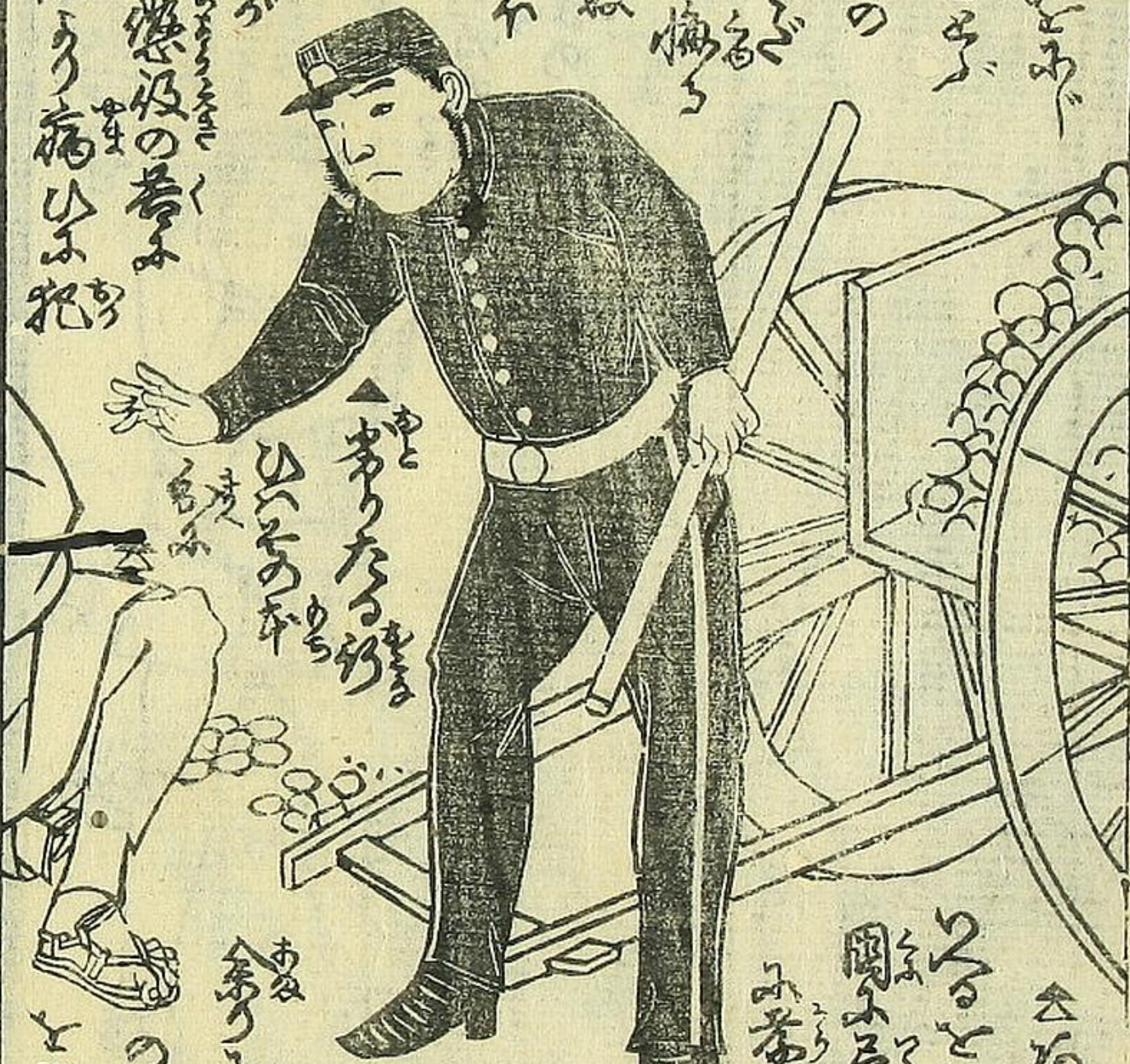
15

20

25



つまじくも有月魚と
 ほ相ひつらとど
 さんまうね狩場の
 稚子のちろくさ
 糸のちろくさと
 とゆ今更彦らぬ
 急ゆ千里流わ不
 うふひとさむ由
 折けて元の善性
 ふまえらるるた
 はかてそ次弟の懲役の善
 絶うて収場さたう病ひお



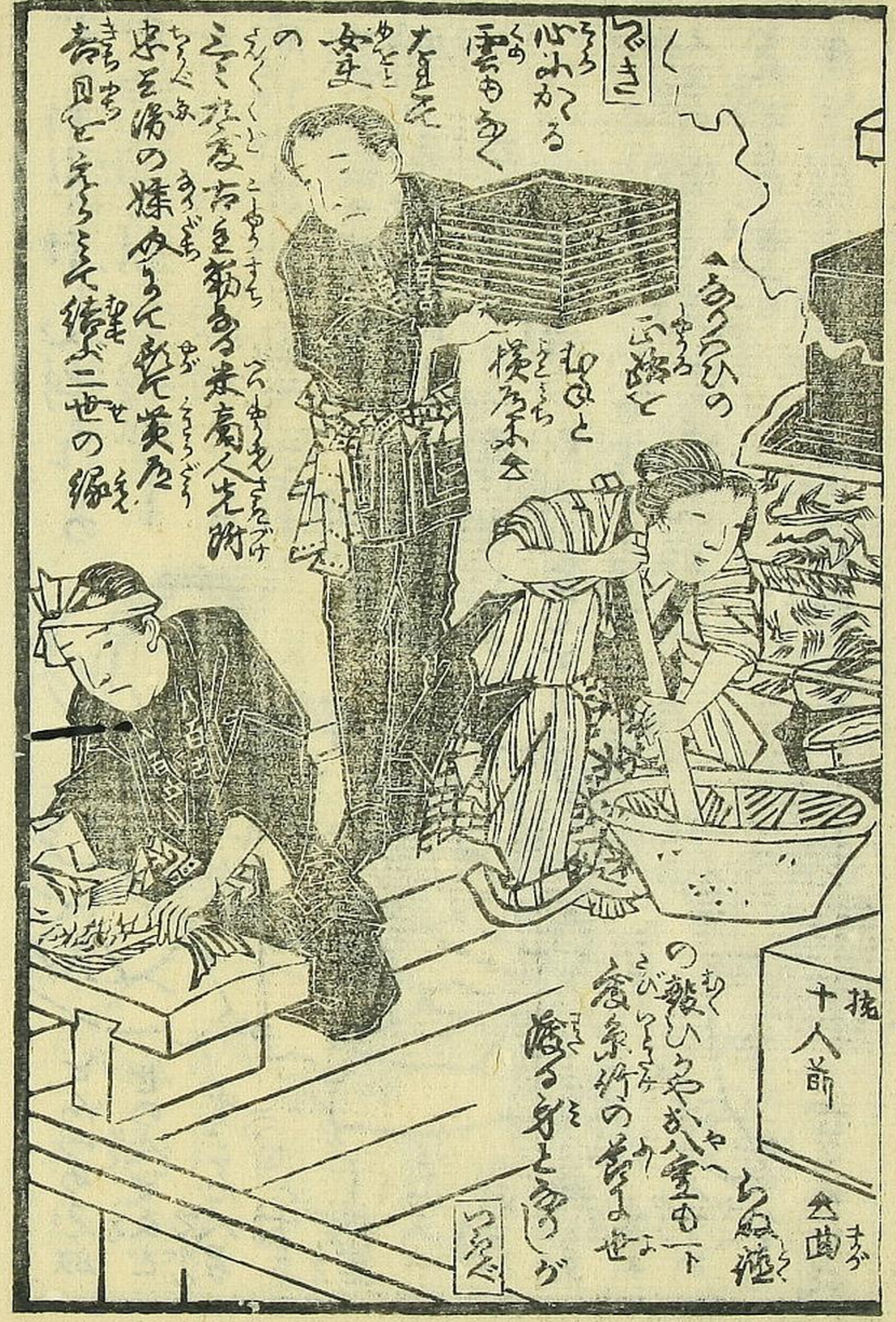
さつとぬと
 りと紙
 圓ふま
 ふるふ
 交わり
 有たを
 是と
 必ひの
 余のふ
 のふ
 と横と

さ道因の者みぬ絶されその
 目橙獄更さるり打閉せ
 より月夜くみ病重りそ
 月一向冥途の藤み報き
 墨へ地獄の奇責み迫り闇魔の
 麻子身舎の礼同業の香墨よ永
 劫の海む遊いあると去の月よ
 一時の栄耀と散り未末のふん
 かのまことあらをこの由涙みん
 人の樂しと又ふた世果みん
 五万の長
 身とふら守り戒めて考獄類み



とつらぬぬ
 世の人と友と
 まるる人
 とは
 一様
 とのへ
 くれま
 情
 身
 八
 身

忠臣蔵三十一



女主人
 の
 心みか
 雲もあ
 女主人
 の
 心みか
 雲もあ
 女主人
 の
 心みか
 雲もあ

十人前
 六曲
 の
 後
 後
 後



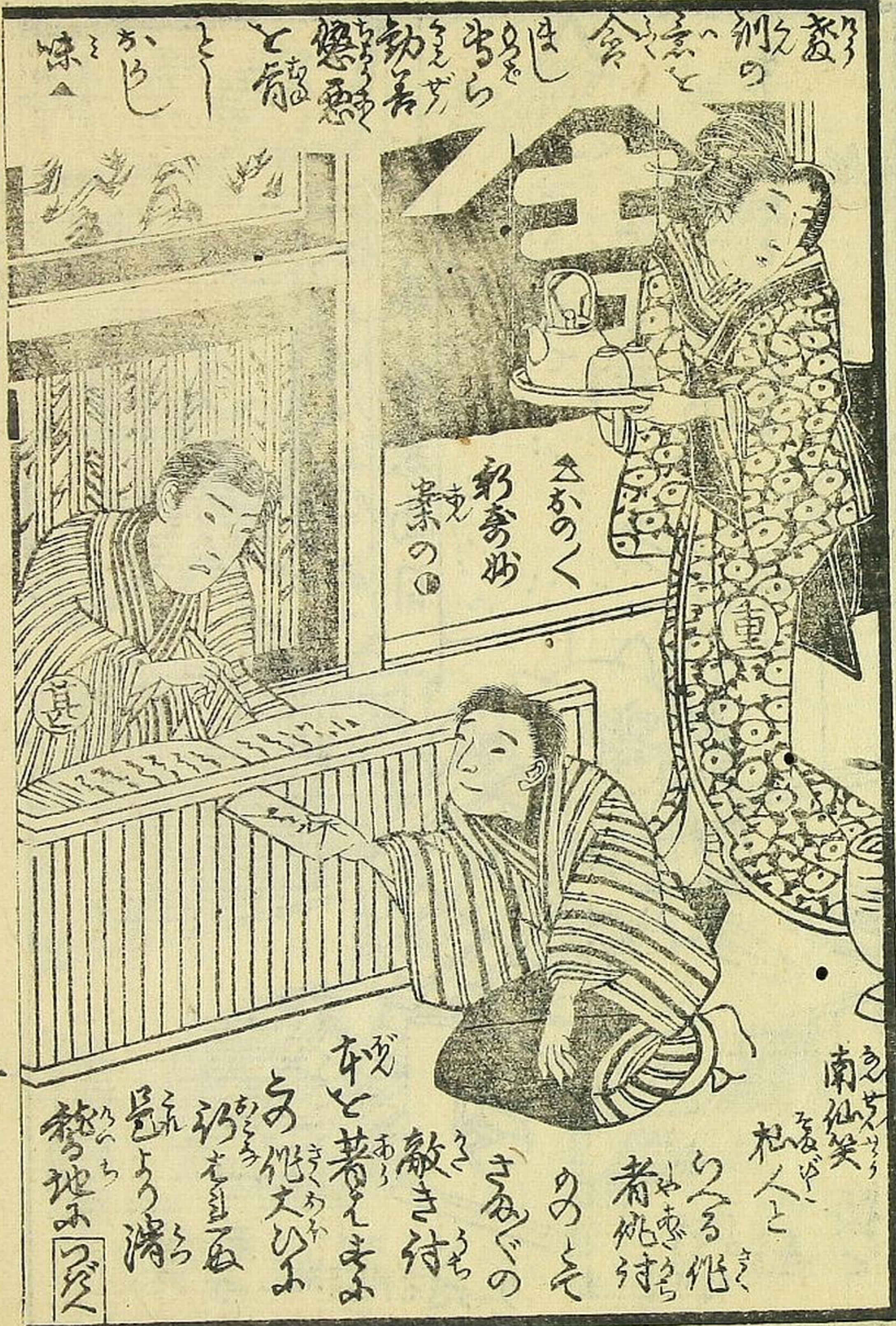
夫よひと年代のそとめとそ若野が家の
 艱をいへ他物料理の七ぬとそ
 杖まのけあまは同出朝のひは杖のま
 をびとる家の業をそとそまは取ま
 ひた物のおひおあひつひ又かゝるあ
 俗びとるあつとくお板のあ
 俗びとるあつとくお板のあ
 俗びとるあつとくお板のあ



つぎ専ら戯化の
 報向と尋一黄
 表紙の二冊物の
 通家のせまる也
 とあるその未年
 より寛政の頃よ
 り山東京傳の
 戯化せよ形宜
 江戸名物の一種
 といふ事あり
 此の世も
 向ハ戯化のつらみ

申み餘一
 けりけ流江
 みつとこ
 馬琴一丸
 三馬飛武
 ひと舞ま
 戯化者
 世よ
 世よ
 限とこ

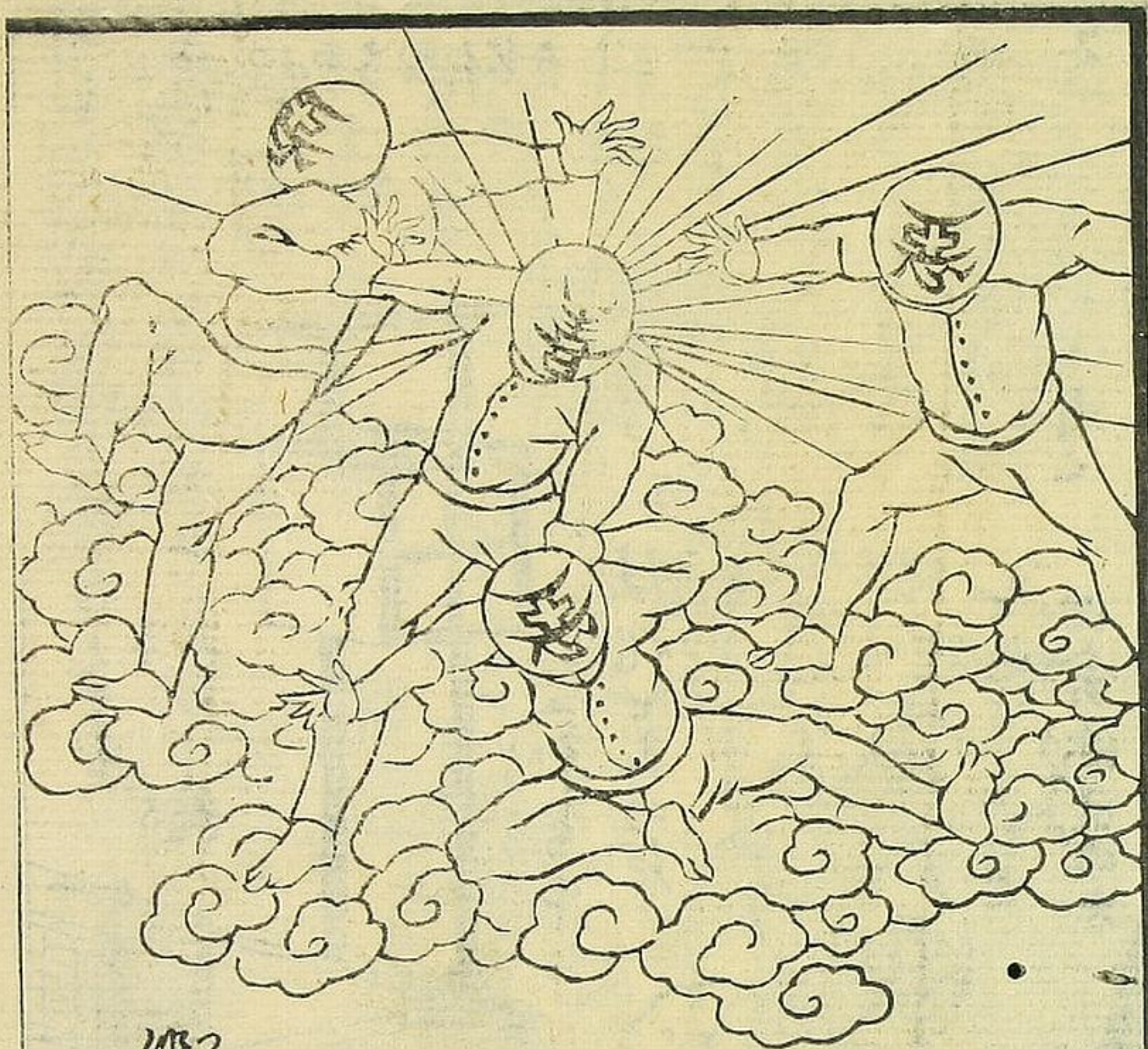
其の中
 向と
 報
 其の中



初之
 會
 味
 と能
 徳
 効
 者
 是
 味

新参の
 業の

南仙笑
 松人
 者化付
 のの
 さあ
 敵き付
 本と著
 文ひよ
 新
 是
 替地



此の毒紙
 小改の系傳の重組を
 二冊と一冊十枚と二冊
 小別けよりより強の
 面白がる小文化年号
 合巻と社説とある山東京
 著の甚有述よ改と曲亭
 馬琴の化世ふけいしね
 初て系傳の合巻系山中
 他り出ぬほど合見ありて
 他り業せむけい高ハ
 頁



佛骨庵
 本来無面目
 蔵化者欄
 揚らるる
 三馬

強盗物語
 怪談の物
 二冊と一冊
 他り出ぬ
 類と

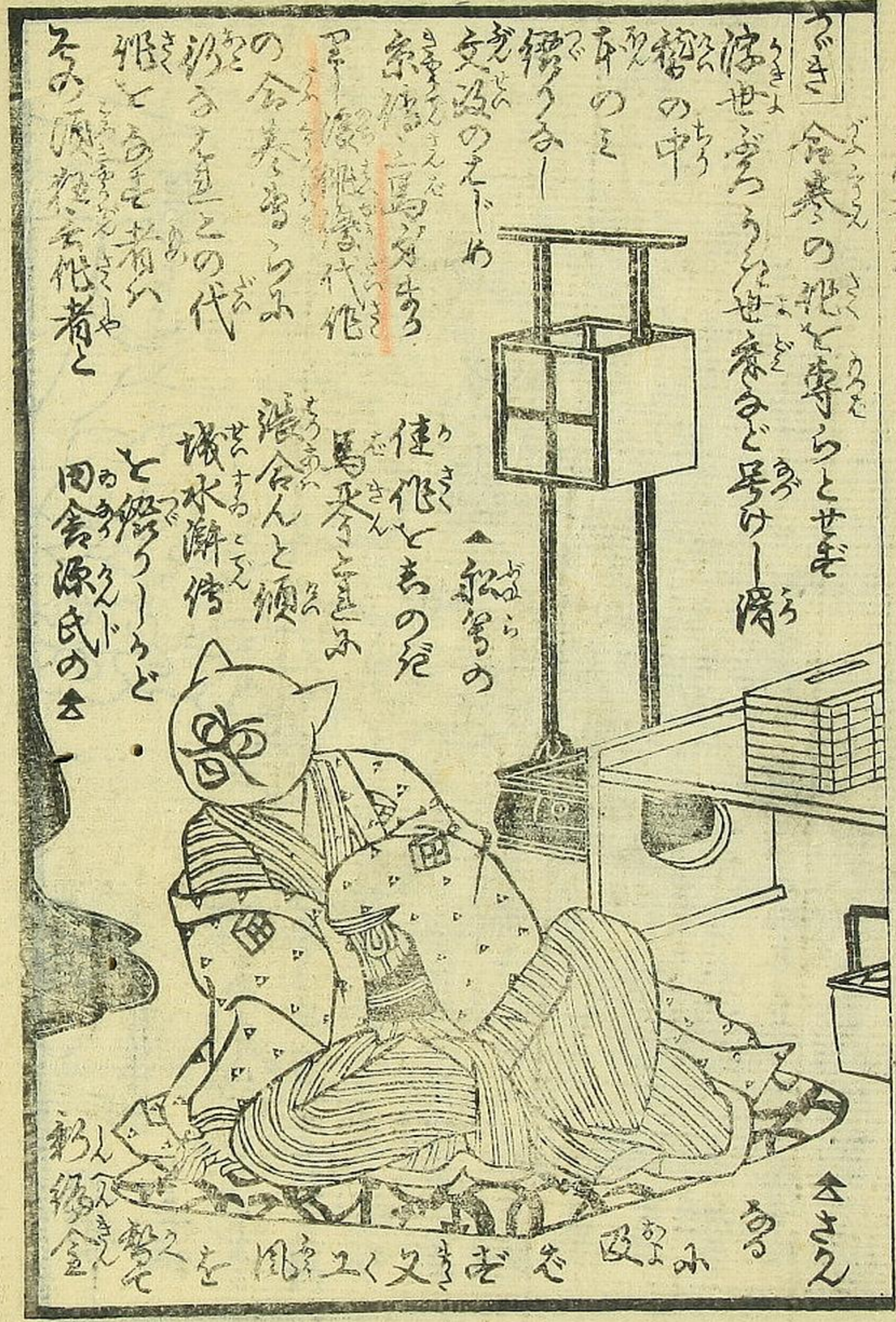
恋掛

五



戯化と通たる
 花笠巻女と系
 とり入る者ろと
 史より物
 かなり
 豊後り
 天保の
 之より頃
 其の年さし一
 して柳舟種彦の
 田舎源氏曲身
 漢楚擬軍倭金ひら

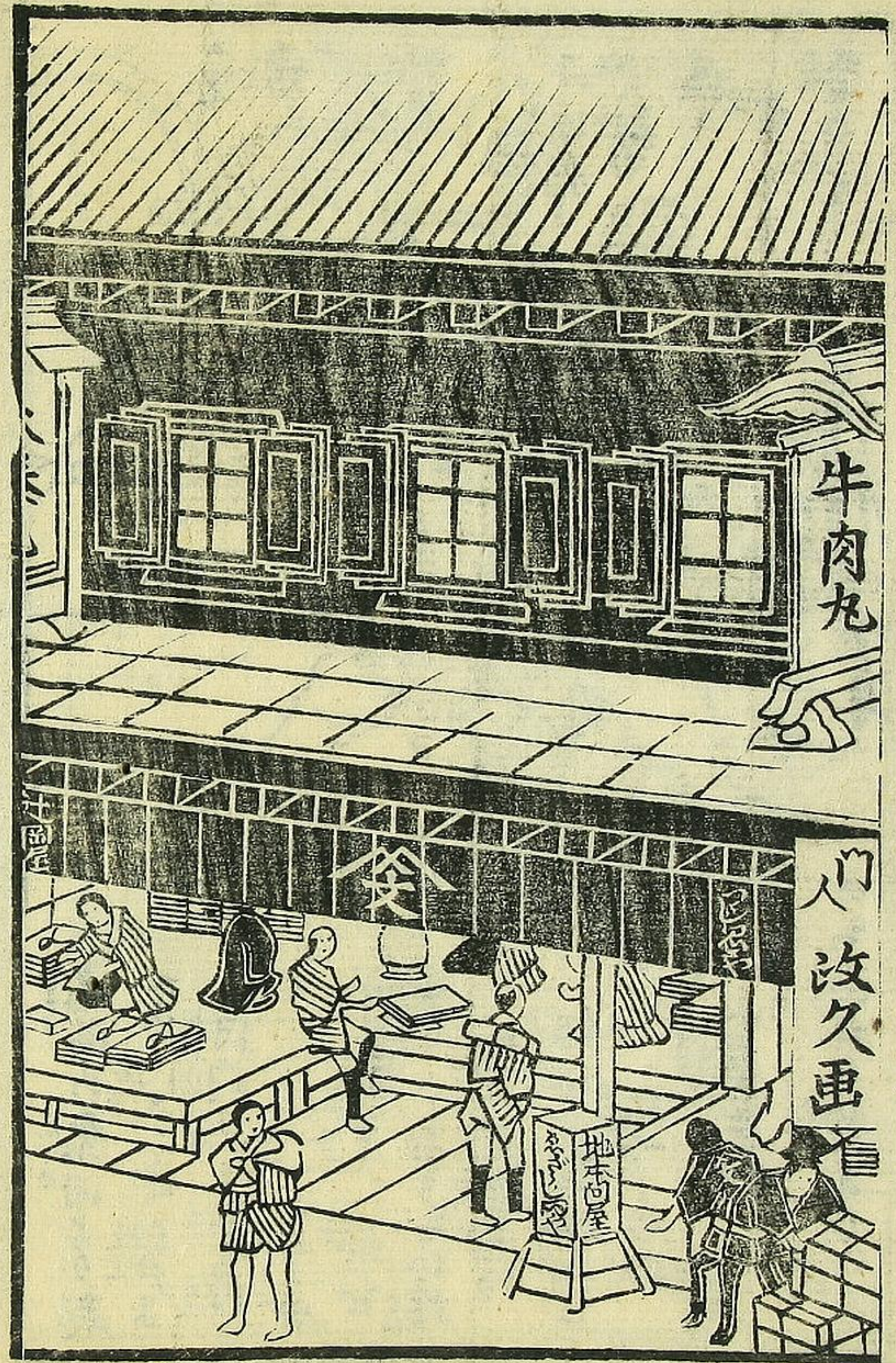
狐と
 挿と
 世に
 評多
 くは
 田舎源
 氏
 政府の
 憐忌と
 りとあり



合奏の化と専らとせま
 世さうらう世さうらう
 稽の中
 年のこ
 轡うみ
 文政のそとわ
 系信
 早
 の合奏
 此る
 惟と
 その

佳化と
 馬
 浪合
 城水
 と
 田舎源氏

狐
 を
 用
 工
 又
 ぎ
 を
 改
 小
 身



心村坊

つき 多し 備の 常へ 金とく

手 授 万 後 と 大 老 利 節 の

幼 強 力 横 山 所 の 者

鋪 の 大 横 枝 の 者

て 衆 の 志 分 合 者 之

ぶ ち 金 と 小 東 系 の

更 此 の 名 世 備 有 徳 下

徳 國 下 ち ち ち 文 の 一

梅堂國政画

猫々道人著



源之の

お 蔭 と

あ ら び の

声 と し き

年 と も 久

て 聖 ひ 多 々

六 六 七

長

坂 倉 傳 書 大 師

高 橋 河 傳 書 大 師

川 上 胤 隆 大 師

國 定 忠 大 師 後 右 衛 門 尉

藤 堂 周 以 大 師

江 東 寺 三 大 師

水 錦 隅 田 大 師

堂 因 政 大 師

格 蘭 氏 傳 倭 文 貴

編 西 史 西

父 地 本 問 答



葉子函

